

# 116

人の  
利用者アンケート調査報告書

## 発達障がい者 116人の意見

生きづらさ と 生きる工夫

－ わかりにくい障がいを本人から学ぶ －



## 『 岬 』 石出 陵平 作

この絵は、あいポート利用者の作品です。柔らかい雰囲気のある素敵な絵を描かれるので、当時殺風景だった、あいポートの相談室に飾る絵を依頼しました。その時に描いていただいた絵の1枚です。あいポートのイメージに合うと思い、使用させていただきました。

## 『 あいポート 』の由来

あい は板橋区の i、そして愛を表します。ポートはフランス語で扉、英語で港を意味します。

迷える人が気軽に開けられる扉であり、また長い人生航海で、休憩をしたりエネルギーの補給、航路を相談できる港でありたいという思いが込められています。

※2020年あいポート開設時、公募により決定した。

# はじめに

発達障がいとは実態が把握されていない「障害」です。どのような人が障がい者なのか、どれだけの人が、どのような支援を必要としているのか、あいまいな状態です。客観的な診断が難しく、福祉的な支援の歴史が浅い、大人の発達障がいの実態把握と支援の方向性を明らかにすることは、あいポートの役割の1つです。

開設前には板橋区内の現状を把握するために、親の会と支援者の調査を行い、すでに疑い含めて約800人の発達障がい者が支援につながっていることがわかりました。支援者の困りごとは、専門職であっても発達障がいの特性理解が難しいことを示していました。そして開設3年目、継続的に支援している発達障がい者が約300人に増えたところで、「どのような人が支援を必要としているか」を分析した実態調査を行いました。障害福祉サービスを利用している人は2割以下で、就労意欲は高いものの家族同居が多く、経済的にも家族の負担が重いことが明らかになりました。そして利用者との関係性が積み上がり、独自の当事者会が発足した昨年から今年にかけて、本人調査に取り組みました。

発達障がいのある人は、こども時代から大人になるまで、どのようなことに困り、どのような工夫をして生活し、どのような支援を望んでいるのか。本人の声を丁寧に聞きとり、社会に届けたいと考えました。

設問作成の段階から専門家や家族に参加してもらい、客観的な視点での調査を心掛けました。利用者のみなさまからは、あいポートへの信頼があつてこそ、率直で熱量のある意見をいただくことができました。こども時代から大人になるまで、社会の中では少数者として苦労を重ねながら、自分の楽しみを見つけ、工夫をして生活していることがわかりました。本来誰もが個性的な人間ですが、人と違うことが生きづらさとなる社会状況があります。今の時代、多くの人を感じている息苦しさと同じ地平にある苦労、人間としてどのように生きるかという根源的な悩みから、私たちは、「発達障がい」という括り方を超えて、価値観を転換するような学びを得ることができました。

「ぼくらが、いつもそこにあると信じて疑わない『ふつう』の世界は、じつは傍らにいる他者によって、つねにその足もとを揺さぶられている」（「うしろめたさの人類学」松村圭一郎）

発達障がいのある本人の声を広く社会に届け、誰もが個性的な、代えがたい一人として、尊重される社会となるように、職員一同今後も努力いたします。

応援いただいた、たくさんの皆様に心より感謝申し上げます。

板橋区発達障がい者支援センター あいポート  
センター長 小山 伸子

# 区長挨拶



板橋区では、令和6年度からの新たな計画である「板橋区障がい者計画 2030 及び障がい福祉計画（第7期）・障がい児福祉計画（第3期）」を策定しました。この計画は、「つながり、支え合い、認め合い、自分らしく安心して暮らし続けられるまち」を基本理念とし、その実現をめざして様々な取組を進めていくものです。

今回の計画には重点項目の一つに「相談支援の充実」を位置づけたうえ、重点項目を推進する主な事業として、「板橋区発達障がい者支援センター事業の実施・充実」を定めました。あいポートには、成人期の発達障がい者に対する総合的な支援の拠点として、安定した日常生活又は社会生活が送れるよう自立と就労に向けた取組や、安心して利用できる居場所づくりを着実に進めることが求められています。

今回のアンケート調査は、あいポートを継続的に利用されている方の実際の声を捉えた大変貴重な調査内容です。このアンケート調査で得られた利用者からのご意見、ご要望などを反映し、より一層相談支援の充実を図っていく必要があります。

今後も、発達障がいへの理解や支援の輪が広がるよう努めてまいりますので、引き続き皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

令和6年 10月 板橋区長

坂本 健

# 調査全体の考察

当事者 116 人の声が耳に届く貴重な報告である。この報告書に目を通せば、世間一般の発達障害のイメージと発達障害のリアルがどれほど違うかわかるだろう。

本調査の対象は成人の発達障害であるが 10 代から 50 代と年齢層は幅広い。発達障害は男性に多いとされているが、本調査は女性が 44%と半数近く、女性の情報が得られることも貴重である。発達障害であるからには子ども時代から特性があったはずである。しかしながら子ども時代に診断を受けていた人は全体で 32%、30 代以上だと非常に少なく 58 人中 6 人しかいない。一方、過半数の人が子ども時代から困りごとが始まっている。もっとも多い困りごとは対人関係であった。学校での苦難を多くの人が語っている。現在の学校生活は発達障害のこどもにとって、今のほうが良い環境になっているのだろうか？発達障害のこどもの学校教育のあり方について成人の発達障害者から学ぶことは多いだろう。

本調査からは、困りごとに対しても当事者が自分なりの工夫や人の力を借りることで対策をしていることがわかった。それでも、日々の生活は大変なことが多い。

今でもカミングアウトを難しいと感じている人が多いことは残念なことである。まだまだ社会の偏見や誤解は強い。日本の社会では、発達障害の人を「困った人」だと思っている人が多そうだ。実際には多数派の人が少数派の発達障害の人を困らせているということも多い。

多様性が叫ばれている現在も、まだまだ同一化への圧力は大きい。例えば、「コミュニケーションの困難」についても発達障害の人のコミュニケーション能力を伸ばすという発想では解決しないことが多いだろう。コミュニケーションは 2 者以上の間で生じるのだから、多数派の人が少数派の人を誤解していることが多いということも現在ではわかっている。互いに理解しあうという視点が必要である。

あいポートが利用しやすい理由としては、「職員の対応が安心・信頼できる」が 70%と もっとも多かった。これはあいポートが誇るべきことである。とともに、一般社会で出会う人たちが「安心・信頼できる」とは限らないことを示唆している。多数派の人たちが少数派のあり方を尊重するような社会になるように努力していこう。

スーパーバイザー

福島学院大学副学長 / よこはま発達クリニック院長

内山 登紀夫

# 目次

はじめに

区長挨拶

調査全体の考察（内山登紀夫（福島学院大学副学長 / よこはま発達クリニック院長））

目次

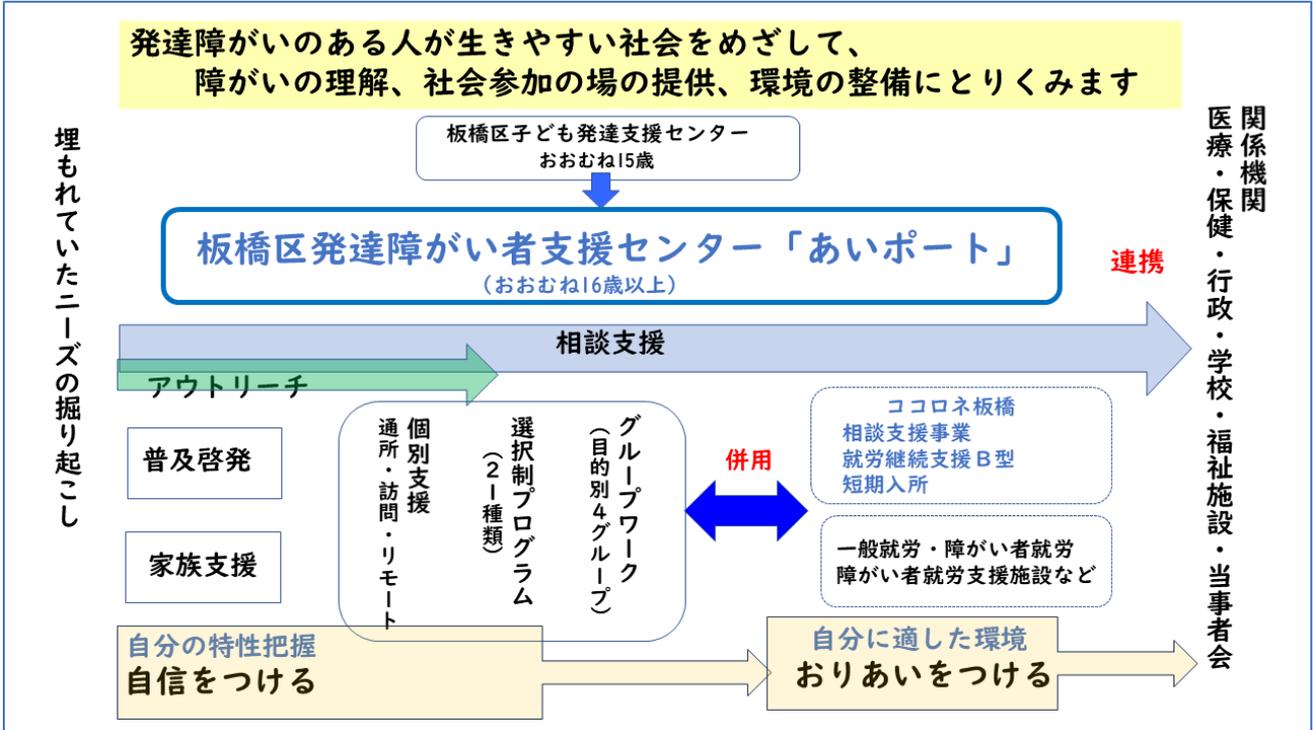
●	序章 あいポート事業とアンケート調査について	1
	1 あいポート事業概要	1
	2 アンケート調査の概要	3
●	第1章 回答者の属性	4
	1 性別と年代	4
	2 発達障がいの診断時期	5
	3 診断名	5
	4 障害者手帳の取得状況	6
	5 主な活動場所	6
●	第2章 あいポートの事業内容の評価と今後の希望	7
	1 あいポートの事業内容の評価	7
	2 講演会等で学びたいこと	9
	3 あったらいいなと思うこと	11
●	第3章 発達障がいのある自分についてどう考えているか	13
	1 趣味	13
	2 強み・得意なこと	14
	3 社会貢献したいか	15
	4 こども時代の困りごと	18

5	今、困っていること	21
6	今の困りごとについて、対処法と工夫	23
7	今の困りごとについて、あると助かる支援	25
<b>●</b>	<b>第4章 発達障がい者の社会的な課題についての当事者の意見</b>	<b>27</b>
<b>●</b>	<b>第5章 発達障がい者116人の意見から</b>	
	<b>～生きづらさと生きる工夫～</b>	<b>30</b>
1	今だから言えることも時代の辛いこと	30
2	大人の発達障がい者は何が大変なのか	31
3	どのような工夫をして生きているか	33
4	どのような支援を必要としているか	34
5	社会への提言	36
<b>●</b>	<b>第6章 利用者懇談会</b>	<b>37</b>
1	あいポートにつながるまでの経緯(ライフストーリー)	37
2	あいポートを利用する意味	38
3	社会と自分に必要なこと	38
	<b>関係者寄稿</b>	<b>40</b>
	<b>報告書検討会の概要</b>	<b>42</b>
	<b>巻末資料</b>	<b>44</b>
1	利用者懇談会の全文	44
2	自由記述の全文	53
3	アンケート調査票	64

# 序章

## あいポート事業とアンケート調査について

### 1 あいポート事業概要



### プログラム（社会参加訓練）

人と交流しなくてもできること

個別支援室  
パーソナルトレーニング  
女性のための個別の時間  
3Dデザイン自主勉強会  
アロマ教室  
ヨガ教室  
音楽の時間  
イラストサークル  
アートの時間  
布コラージュワークショップ  
心身機能調整法

少人数の集団参加

火曜グループワーク  
水曜グループワーク  
木曜グループワーク  
演劇部  
運動サークル  
ミドル世代活動交流会

ミーティングまたは様々な人との交流

金曜グループワーク  
土曜クラブ  
テーマ別情報交換会  
利用者学習会  
SST  
子育て情報交換会  
女性の情報交換会  
一般就労情報交換会  
フリースペース

担当職員との相談

枠組みは明確に、人権尊重は厳格に、それ以外は自由に

## 見えてきた課題

制度の狭間にあり無支援の状態であらう苦しんでいる

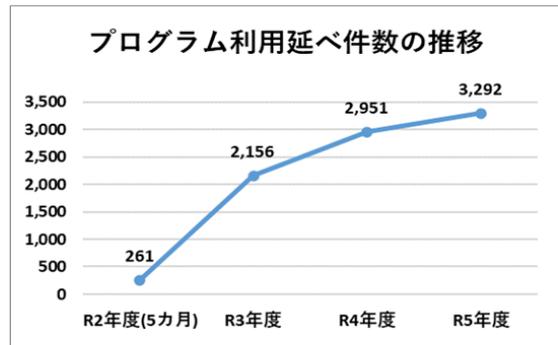
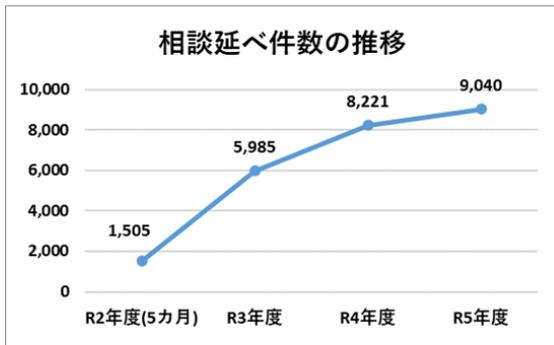
合わない環境での不適応や困難が大きい状況となっている

社会のあらゆる困難の中に発達障がいの問題がある

## 有効な支援

- ・発達障がいの特性に配慮した環境整備
- ・人と交流しなくてもできるプログラム
- ・個別支援と段階をふんだ集団参加
- ・安心して失敗できる雰囲気
- ・職員の謙虚でおだやかな対応
- ・当事者同士の支えあいの機会

## 開設4年間の利用実績



開設4年間の相談者実数 968人

### 2023年度実績

相談者実人数	487人	継続相談者数	374人
新規相談者数	237人	プログラム登録者数	139人

\*継続相談者（初回面接後、継続的に支援している人）  
\*プログラムの利用には主治医意見書と区への登録が必要

## 2 アンケート調査の概要

### 【 調査目的 】

発達障がいの実態を把握して、必要な支援を検討する。わかりにくい障がいを本人から学び、発達障がいの理解を社会に広める。

### 【 調査期間 】

2023年10月～2024年1月末(当初2023年12月末までの予定から延長した)

### 【 調査対象 】

調査期間において、板橋区発達障がい者支援センターあいポートを継続的に利用している方

### 【 調査方法 】

アンケート用紙とオンラインフォームによる調査を実施した。

アンケート用紙にオンラインフォームのQRコードを貼り、どちらか一方の任意の方法で回答いただいた。

### 【 回答の回収 】

オンラインフォームによる調査はGoogleフォームで作成したフォームへの回答にておこなった。

アンケート用紙の回収は、アンケートボックス、手渡し、郵送にておこなった。

記載が難しい方には、聞き取り形式で実施した。

- ・配付数：157名
- ・回答数：116名(アンケート用紙67件、オンラインフォーム49件)
- ・回答率：74%
- ・自由記述は合計約35,000字(懇談会は含まない)

### 【 自由記述の掲載について 】

自由記述の掲載にあたっては、できる限り原文のまま掲載することを原則とし、表記や語法等の明らかな誤りと認められる箇所の修正および、文意が通りにくい箇所の補足をおこなった。また、プライバシー保護と、冊子全体と文字数のバランスを考慮し、一部省略して掲載している場合がある。

### 【 第5章における自由記述引用の表記 】

[問番号] 質問	引用タグ
[問3-2]あなたは、子ども時代どのようなことに困ったか、具体的に教えてください。	子ども時代の困りごと
[問3-4]あなたが今、困っていることを具体的に教えてください。(例) 対人関係・仕事・生活やお金・健康(感覚過敏・薬、体調)など	現在の困りごと
[問3-5]問3-4の困りごとについてあなたなりの対処法や工夫があれば、教えてください。	対処法、工夫
[問3-6]問3-4の困りごとについて、「このような支援があると助かる」と思うことがあれば、教えてください。	どんな支援があるといいか
[問3-7]発達障がいの社会的な課題(精神科医療、一般の医療、仕事、福祉サービス、社会的環境、人々の理解など)について、あなたの意見を聞かせてください。	社会的課題

### 自由記述のカテゴリと件数について

自由記述の全ての回答を読み、回答の傾向を把握するためにカテゴリを作成し、原則すべての回答にタグ付けをして件数を出した(1つの回答が複数のカテゴリにあてはまる内容の場合、2つ以上のカテゴリに1件ずつ計上した)。

カテゴリの作成とその件数は作業者によって判断に差が生じる可能性が十分にあり、あくまでも傾向を把握するための参考数値として掲載した。

自由記述から作成したグラフ

図2-8

図2-9

図3-1

図3-4

図3-6

図3-8

図3-11

図3-12

図3-13

図4-1